

A・Bレベル共通

1. 対象者について

(1) 年少者には使用が難しいように思うが、中学生や高校生の学習者にも活用できると考えているか。

→ 『まるごと』は海外の成人学習者を主な対象として作成しましたが、中等教育でも使用する機関が出てきています。しかし、中高生が楽しく学べるトピックもあれば、飲酒の場面などもありますので、各トピックの内容が適切かどうかは授業を担当される先生方に吟味していただき、問題がなければ使っていただけるものと思います。

(2) 『まるごと』は課題遂行を強調しており、従来の教科書と比べて実践的であると思うが、ニーズが異なる海外と国内のいずれにも適したものと考えてよいだろうか。

→ 買い物や交通など、実用場面での会話に限ってみれば、国内と海外では日本語使用の必要性が大きく異なります。

しかし、話者が互いに知り合うことを目的とした交流場面での会話や他者への配慮等からなされる会話については、国内外を問わず使用場面としてあり得るものだと考えています。『まるごと』は相互理解の観点からこの2種類の会話を重視しているため、これらが Can-do 会話に占める割合も高くなっています。つまり海外だけでなく国内でも使用できる Can-do が数多く取り入れられています。

2. AレベルとBレベルの関連性について

(1) AレベルとBレベルの教科書の関連性はどうか。

→ Aレベルは、JF 日本語教育スタンダードの「基礎段階」に相当します。教科書では、自然な日本語や場面状況を提示しながら学習を進めていくことを目指していますが、学習を効果的、効率的に運ぶために必要な条件を考慮しながら言語レベルを調整してテキストを作っています。

一方、Bレベルは、JF 日本語教育スタンダードの「自立段階」に相当しています。学習者は様々なストラテジーを使いながら、より本物に近いオーセンティックなテキストにも対応できるようになることが期待されています。

このように、学習段階による違いはありますが、どちらのレベルも「相互理解のための日本語」という JF 日本語教育スタンダードの理念に基づいて作られています。また、両者ともに「言語は使いながら使えるようになる」という考えのもとに設計されています。

(2) Bレベルでの「相互理解のための日本語」について、Aレベルとの連続性や違いを聞きたい。

→ 目標となるコミュニケーション活動の Can-do を選ぶにあたっては、BレベルでもAレベルと同様、言語による具体的なコミュニケーション活動を通じて、相互理解が深まるという点に配慮しています。例えば「日本人に自分の国のことを聞かれたら情報提供できる」「知りたいことを質問できる」「相手の話を聞きながらコメントできる」「困ったときに交渉できる」などの人と人の交流を通じて相互理解も深まっていくと考えています。Aレベルとの違いがあるとすれば、できる「言語行動」の内容が異なるということでしょう。

(3) Aレベルでは、オーセンシティやストラテジーについてどのように考えているのか。

→ オーセンシティについては、実際にありえる自然な場面状況を提示しながら、Aレベルの言語使用者の条件を考慮したテキストを使用しています。その意味では、学習者が使用できる日本語のレベルは日本語母語話者が使用できる日本語のレベルとは違っています。ストラテジーについては、Aレベル段階から考慮されています。例えば、「わからない言葉や表現を繰り返してもう一度言ってもらおう」、「視覚情報を利用してコミュニケーションをはかる」(例:パンフレットを見せて人を誘う)などのストラテジーが、教科書のやりとりの流れや表現の中に多く取り入れられています。

3. 教授法・指導について

(1) 初めて日本語を学ぶ人に日本語に関心を持ってもらい、少しでもコミュニケーションをできるようにする教授法やノウハウについて聞きたい。

→ 日本語を学び始めたその日から、コミュニケーションができるようになることがなによりも大切だと考えています。ひらがなを覚えるまでは何もできない、基礎的な文型を学習するまでは何も伝えられないということではなく、限られた言葉を工夫して使えば、簡単なコミュニケーションができるということを、クラスに来る学習者に実感してもらえるような学習方法が必要でしょう。そういう意味で、課題遂行を出発点として授業をデザインすることが効果的だと思います。

(2) 1課から順にやらなくても未習語などの問題はないか。

→ 『まるごと』のカリキュラムはトピック・場面を軸にして設計されています。そこでは言語項目の積み上げ(前の授業で教えた項目は学習済みであることを前提にはしていません。特に語彙はトピック・場面によって規定されるものが多いので、新しいトピック・場面に進むたびに、そこで必要なものを導入したり確認したりすることになります。したがって、1課から順番にやらなくても大きな問題にはならないと考えています。

(3) 非英語圏の学習者に英語訳は役に立たないと思うが、どう対処すればいいか。

→ 『まるごと』を使って授業をしている国は様々あり、それぞれの国で必要な共通語を使って授業をしています。また、今後、現地出版を行う場合は、英語の箇所を当該国の言語と差し替えて出版する予定です。

(4) 媒介語を使うことについて、どのように考えられているのか。媒介語使用の是非を「効率性」以外の観点から議論する必要があるのではと思い、質問したい。

→ 媒介語は、指示や説明のため、日本語を翻訳するために使われますが、それだけではなく、学習者を動機付けたり、言語や文化への気づきを促したりする上で大切だと考えます。特に初級のクラスでは、媒介語を使うことで初めて、このようなことが可能になります。そういう意味で、媒介語をクラスで積極的に使うことを提案しています。『まるごと』を利用する際、目標言語である日本語と学習者の言語(媒介語)の両方を、また両方の文化について理解している教師が果たす役割は、とても大切になるでしょう。

4. 評価について

(1) 各レベルの修了認定の方法について聞きたい。

→ 『まるごと』の評価では、課題遂行を確かめるためにパフォーマンス評価を取り入れることが前提になっています。実際に『まるごと』を使用している国際交流基金の海外拠点の JF 講座では、ロールプレイなどを取り入れた口頭テストを行っています。また、ポートフォリオ評価を取り入れていることも『まるごと』の特徴でしょう。なお、JF 日本語教育スタンダードのレベルを公的に認定するテストは、現在、開発されていません。

(2) 教育現場では、JLPT につながらない教材はなかなか受け入れられないという事情があるが、『まるごと』や JF 日本語教育スタンダードは JLPT(日本語能力試験)の枠組みにどのように対応しているのか。

→ 『まるごと』の作成にあたっては、『まるごと』初級 1 まで終了している場合は N5、初中級までの場合は N4 と想定しています。また、『まるごと』初級 1、初級 2 を使用している国際交流基金海外拠点の JF 講座の学習者で、JLPT に合格する人は珍しくないという実態もあります。ただし、『まるごと』は日本語能力試験の対策本ではありませんので、日本語能力試験合格を目指す学習者は、試験対策問題集などを使って、別途、準備をすることをおすすめします。また、JLPT が JF 日本語教育スタンダードに対応していない点については、国際交流基金の大きな課題として受け止めています。現在、JLPT 受験者に情報を提供する目的から、JF 日

本語教育スタンダードに基づいたパフォーマンス評価と JLPT 合否判定との関連を探る調査を実施中です。詳細は[中間報告書](#)をご参照ください。

* 中間報告書「JF 日本語教育スタンダードに基づいたパフォーマンス評価と日本語能力試験の合否判定との関係ー国際交流基金研修参加者を対象とした試行調査ー」(2012)は、ウェブサイト「[JF 日本語教育スタンダード](#)」<[jfstandard.jp](#)>の「JF 日本語教育スタンダード活用事例」よりダウンロードできます。

5. 異文化理解能力について

(1) 課題遂行能力と異文化理解能力はどのように関係しているのか。

→ JF 日本語教育スタンダードでは、これら二つの能力は一直線に伸びていくのではなく、相互に影響し合いながらスパイラルに発達していくものであると考えています。[『JF 日本語教育スタンダード 試行版』](#)(p19)にも記述がありますので、ご参照ください。

*『JF 日本語教育スタンダード 試行版』(2009) はウェブサイト「[JF 日本語教育スタンダード](#)」<[jfstandard.jp](#)>の「JF 日本語教育スタンダードとは」からダウンロードできます。

(2) 異文化理解能力について、どのような知識、態度、技能が必要で、それをどのようなプロセスで養っていけばいいのか、Can-do のように段階性があるのか。『まるごと』の中にどのような観点で埋め込まれているのか。

→ 『まるごと』(A レベル)では、異文化を理解する能力を持つ人というのは、「さまざまな文化に触れることで視野を広げ、他者の文化を理解し尊重する人」「日本語を使って、相手の考えを受け止めながら柔軟にコミュニケーションできる人」「他者との関係を構築するためにコミュニケーションできる人」とイメージしています。そこで、『まるごと』では、単に事物の説明にとどまらず人々の生き方や考え方、価値観が浮き彫りとなるよう留意して、文化の学習を取り入れるようにしました。詳細については、以下の論文をご参照ください。なお、異文化理解能力を整理することは、今後の課題と認識しています。

* 来嶋洋美・柴原智代・八田直美 (2014)「[『まるごと 日本のことばと文化』における海外の日本語教育のための試み](#)」『国際交流基金日本語教育紀要』第 10 号

6. その他

(1) 教師教育への影響について聞きたい。

→ 課題遂行を出発点とした日本語の学習デザインでは、学習者のニーズに合った課題の選択や学び方が重要だと考えられます。たとえば、日本で短期間で試験合格を目指す学習者と、海外で長期的に趣味で学ぶ学習者が、同様の学び方になっている現在の状況は変えるべきでしょう。そして、そのためには、例えば、文型積み上げなどの特定の教授法だけを身につけるのではなく、学習者に合わせて課題遂行型の臨機応変な教え方ができる教師を育てるような教師教育が必要だと考えられます。

(2) 課題遂行能力は、TBLT (Task-based language Teaching) の考え方と共通すると思うが、相違点があれば聞きたい。

→ 課題遂行を志向する言語教育と TBLT には、学習者に課す教室活動が言語形式ではなく意味伝達中心である点、現実世界を想定したオーセンティックな言語使用を求める点など、共通点が多くあります。TBLT における「タスク」とは、学習活動における言語使用の単位で、exercises (言語構造に焦点を当てた練習問題) と対比される概念であり、TBLT はその「タスク」でシラバスを組む言語教育アプローチです。一方、本シンポジウムが言及した「課題遂行」は、現実世界における言語行為そのものを指します。『まるごと』が学習目標として設定している課題 (Can-do) は現実世界の言語行為ですが、『まるごと』の教室活動にはタスクを含んでいると言ってよいと思われます。

A レベルに関して

1. 教科書の使用方法について

(1) 「かつどう」「りかい」の両方を使うのが理想的か。

→ 「かつどう」だけのコース、「りかい」だけのコース、併用するコースのいずれにするかは、学習者のニーズや学習歴等から判断してください。ある程度長期的に学習しようとしている初学の学習者が日本語を総合的に学ぶ場合は、両方使うのが望ましいと考えています。

(2) 「かつどう」のみの授業、あるいは「かつどう」→「りかい」という順番で学ぶ場合、学習者にルールを発見させる帰納的学習にするために、学習者の質問にはどのように、また、どこまで答えればいいのか。

→ その課で扱っているトピック場面に規定される表現の意味と形が一致すれば十分です。例えば、構造シラバスの教科書で教える際には、活用規則にしても動詞のグループすべてについて丁寧に教え、形の正しさを重視しますが、『まるごと』『かつどう』は基本的に「こんなときにはこう言う」というごく軽い言及にとどめます。「りかい」も併せて使う場合は、ルールの説明はそちらであることを学習者に伝えておくことが大事です。

(3) 入門レベルで、すべて日本語だけで授業が進められるか。

→ 日本語だけで授業を進めることは教師にとっては可能ですが、学習者の側からすると不安が残ります。教師にできることとしては、語彙リストに学習者の母語訳を載せたり、異文化理解学習のために学習者が理解できる言語(母語など)で作成してある情報源(ウェブサイトなど)を紹介するなどしてはどうでしょうか。教師が学習者の母語を話すことができない場合は、協力者を探してみたいと思います。学習者と母語が同じで日本語のレベルが上の人などに、協力を依頼することも有効でしょう。

(4) 入門(A1)「かつどう」でも文字情報(ひらがな、ローマ字、英語)が多いという印象を受けた。聞かないで文字を活用する、読みを重視するなどの学び方があってもいいか。

→ 『まるごと』は音声を文字に先行させた学習方法を採用します。まず日本語を音声で理解し、文字は音声の後を追いかけるように学習するというわけです。このような方針なので、音声を抜きにして文字の読みを重視するというような活動は行いません。ただし、文字の形を認識する活動はあります。例えば、メモに手書きで書いてある訪問先の名前と表札の名前を照合するというような活動です。

入門(A1)は音声をあらかず表音文字をまず使用するために、ローマ字で表記しています。これによって、耳に入る音を確認し、再生する際のヒントにするためです。文字学習の目標としては、「かつどう」入門では終了時までにはひらがな・カタカナ表記の語(音声で既習の語をかな表記したもの)が60パーセント読めることとしています。しかし、自筆で書くことは目標としていません。ローマ字のシステムを使い、いくつかの点に注意すれば、キーボードを使って書くことができるからです。

さらに、指示の内容は学習者にわかる言語で示したいので、英語で書いています。

以上のようなことは、すべて音声を重視する一方で、文字学習の負担を軽減するために行っています。本編中で使用している文字の種類は複数になりますが、実際には文字への依存度を低くしているというわけです。

(5) 入門(A1)「かつどう」「りかい」を使ったモデル授業を試行してみた。「耳から入る」学習を取り入れることにより、「音声—学習者」の学習時間が増え、その分「教師—学習者」の時間が減少したように感じた。教師はどのように学習者との会話をしたり接触をしたりすればよいのか。

→ 聞く活動をしていると確かに授業が静かに見えて、教師としては何か教えたくなるものかもしれませんが。けれども、学習者が聞いているときは音声を通して学習することに集中することが大切です。「教師—学習者」の時間は、この内的な学習プロセスを促進する目的で行ってほしいと思います。そのためには、効果的に聞くための質問を、学習を阻害しないタイミングで発することが大事です。しかし、いったん学習者が聞いた内容を理解したら、今度はそれについてどう思うか、意見や経験などを引き出す質問をして、教室の雰囲気活性化ができるでしょう。『まるごと』『かつどう』で聞く会話は交流目的のものが豊富にありますので、聞いたあと、学習者は自分自身のことを言いたくなるのではないかと思います。

(6) 入門(A1)段階で省略できる場所はどこか。日本に来る旅行者や実習生にとっては、学習時間の短縮は重要だと思うので聞きたい。

→ 学習時間は「かつどう」単独コース(30時間)、「りかい」単独コース(40時間)、併用コース(70時間)のいずれにするかで判断します。どのコースにするかは、学習者のニーズや学習歴から決めてください。『まるごと』入門(A1)は最小の学習時間で設定してありますが、もしも省略する場合は、学習者が必要としない Can-do を省略するのがよいのではないかと思います。

(7) クラス内で行う異文化理解能力のための活動や、教室外の異文化体験をクラス内で共有するための活動について聞きたい。

→ 『まるごと』入門～初級 2 の「かつどう」には各トピックに「生活と文化」というコーナーが設けられており、その活動を通して文化的な気づきを促しています。また、教材の中には自文化と比較し内省を促すための問いが埋め込まれています。また、『まるごと』では学習者がポートフォリオを作り、教室外の体験や気づきを記録することを推奨しています。本シンポジウムの西山恵子講師(国際交流基金シドニー日本文化センター)の実践報告も併せてご参照ください。

2. 周辺のリソースについて

(1) 教師用指導書はあるのか。

→ 「教え方の手引き」や語彙や表現のインデックスなどの教師用リソースをウェブサイトで公開しています。ウェブサイト「[まるごと 日本のことばと文化](http://marugoto.org)」の「[教師用リソース](#)」より必要なものをダウンロードしてください。

*「まるごと 日本のことばと文化」<marugoto.org>

(2) 必要に応じて Web 上から語彙帳がダウンロードできるのは大変有用だと思う。各言語での文法解説書のようなものがあれば、学習者の自主学習にもつながると思うが、出版予定、またデータの公開予定はあるか。

→ 文法解説書等の開発、出版については未定です。ただ、国際交流基金の海外拠点が独自に作成した文法解説書が、以下のウェブサイトで一般公開されています。

*[スペイン語](#)<http://www.fundacionjapon.es/LenguaDetalle.sca?leng_id=27&id=11>

*[ロシア語](#)<<http://jpfmw.ru/ru/yaponskij-yazyik/jfcouza.html>>

*[ドイツ語](#)<<http://www.jki.de/japanische-sprache/marugoto.html>>

※ リンクは予告なく変更されることがあります。

また、「[まるごと+\(プラス\)](#)」という学習者向けのウェブサイトでは、『まるごと』入門および初級1の内容に沿ったコンテンツを提供していますので、学習者の自主学習にお使いいただくことができます。現在、日本語、英語、スペイン語の3言語で提供しています。

*「まるごと+(プラス)」<marugotoweb.jp>

B レベルに関して

(1) PART2「会話する」のロールプレイ(例)の音声で、日本人の役割部分が非母語話者の音声になっているのはなぜか。

→ ロールプレイは、クラスで学習者同士で行うことが前提になっています。そのため、ロールプレイ(例)の音声も、実際の活動の参考になるように、あえて学習者(非母語話者)の声を使って録音しています。

(2) 教科書で取り上げられている課題遂行場面が比較的限定的で、日本の社会的文脈があまり表れていないように感じる。それについてはどう考えているのか。

→ 『まるごと』Bレベルの開発では、海外の日本語学習者が出会う可能性のあるコミュニケーション場면을教材に取り入れることを優先しています。そのため、日本に来て日本語を使って何かをする(たとえば買物をする、旅行する、アパートを借りる、地域の行事に参加する)という意味での日本の社会的文脈は感じられないかもしれません。しかし、海外の日本人との接触場面で必要な社会的文脈については、教材の中に取り入れてあります。

(3) 素材として、レディ・ガガのようなものを取り上げられているのはおもしろいと思うが、数年後には時代遅れにならないか。

→ 歌手、マンガなどの素材については、すでに一定の地位を確立していて、10年後にも古く感じないと考えられるものを意識して選んでいます。